

Blown by Mistral

今出 敦



モナコとの国境を越えたのは三十分くらい前だった。

夜行列車は、地中海沿岸を舐めるようにして西へ走る。車内には夏服姿の乗客ばかり目立つ。北半球の温帯の季節は秋へと向かっているのに、この地域の秋はこれからのだろう。

西ドイツの山あいの町から南下してスイスを経て北イタリアへ入り南仏へ行く。一年四ヶ月ほど滞在した西ドイツ南西部の町フライブルグを離れる前には少しだけ、必要になるフランス語も習っておいた。

スイスのルガノとイタリアのミラノで一泊ずつする。

三年前に、まとわりつく煩わしさを振り切るようにしてイギリスへ渡った時から格段に、フリーで旅をする要領も心得たものである。

——あの時、狭くてパンク寸前に混んでいた羽田空港国際線

ターミナルまで駆けつけて見送ってくれたみんなは、それぞれ、どうしているだろうか……

イギリス南部の、眠ったような退屈な田舎町にある高額な外国人子女向け全寮制英語学校は立派で、厳格だった。窮屈そのものの女子寮をおん出たら、隣の英語学校へ通いホームステイをして、さらにロンドンへも移り住んだ。そこでバイトもして、ドイツ語の個人レッスンを受けてから西ドイツへ渡る。目的はドイツ語の習得だった。

イギリス滞在が一年半となり、外国人向けの英語の上級試験をさらに受けるのか、それとも帰国するかの選択を迫られた。渡英前に夢想したような秘書課程を受講する気は、とうに失せている。

ドイツ人ではないが、ドイツ語圏で暮らすスイス人のボーイフレンドがいた。彼らが暮らすコンチネント（ヨーロッパ大陸）への興味が湧いた。

スイスには友人たちも戻っている。家へ立ち寄るとベルンでもチューリッヒでも歓迎された。英語ではなくドイツ語も話すようになった孤独な若い日本女性は珍しく、不思議がられて家族からも手厚く遇もてなされた。

南部の保養地ルガノの夜には踊りに行った。近づいてきた若い男は軽い。適当にあしらった。年格好の近い仲間の男の方は、見かけは冴えないが澄んだ眼をしている。明日はオフだからと、朴訥だけれども熱心に国境を越えてミラノまでの旅を自家用車でサポートしたいと口説かれた。今宵を一緒に過ごしたいと口説かれるより数倍も親切で心のこもった口説き方だった。

マリオと名乗る青年は小さなホテルの玄関前まで、翌朝遅れずに車で現れた。

前夜のディスコで、彼ら二人が出稼ぎイタリア人と聞いていた。シチリア島の出身である。マフィアの産地くらしいの貧しい知識しか持ち合わせなかったが、目の前の純朴そうな青年を観察する限りでは、女に見境なく手が早いイタリア男性といったイメージも虚勢を張り徒党を組む無慈悲なマフィアの虚像も、実際のシチリア島出身者とは大きく隔たっていると気づかされる。

イタリア語しか話さない彼と、イタリア語は全く知らない若くて好奇心旺盛なばかりの日本女性の半日ほどのドライブは、軽いノリと行きがかりだけで始まった。共通言語は、彼には片言のドイツ語と、少しだけ通じた、イタリア語とは同じラテン系のフランス語である。

コンチネントの国境を電車に乗って越えることはあっても自動車で越えるのは初めてだった。買っていたチケットは無駄になったが新しい体験をすることへの魅力には勝てない。

マリオは親切だった。自分も久しぶりにミラノへ行きたかったからだと精一杯に説明している。嘘だとしても許せる嘘だった。

普段は蟻のように下働きをする。たまの休みに羽を伸ばし、気の合う仲間と夜中までディスコへ繰り出す。思わぬ出会いもあれば失望もある。世界中の、どこにだってありふれている。

疲れているだろうに、まさに決まっていた約束を落ち着いて果たす聖人のような穏やかさで彼は、眠そうな素振りすら見せない。質素な普段着で現れると、ありふれた乗用車のトランクに軽やかに荷物を積む。スレていない。ホテルの人にも悪びれず笑顔で挨拶する彼は、全イタリアを代表する少年使節もかくやというような誇らしさ溢れる表情をして、若く瑞々しい不案内な黒髪の東洋女性を助手席に誘い、国境の町コモまで車を走らせた。

太古より競り上がるアルプス山脈を覆った氷河が削り取った

りして造形した、複雑に細長い湖に面する町ルガノからコモまで小一時間、目を見張る田園風景である。遠く、九月の光を浴びた壮麗なアルプス山脈の碧さは、いくぶんは見慣れたとはいえ風光明媚と謳われるスイス観光の肝と得心する。

多額の金融資本がイタリアから流入し始めていた地域には、世界から、この地に別荘を持たねばと資産家たちを酔わせるムードが蔓延してきているようだった。既に一等地には可憐な別邸が目立つ。

外国語の出来る不動産ブローカーが暗躍し、美しいスイスの国土も鎖国を貫かぬ限り金と人の流れに抗うことは叶わない。いつの世にも、金も人も、水が高い場所から低い場所へ自然に流れるが如くに無い処から有る処へ向かって必ずや動く。止めることは出来ないのだった。

だがまだ、そんなカラクリなど気にもせず景色に見惚れている。

スイスからイタリアへ国境を越えるのは呆気なかった。ふいに車が一列に連なる。渋滞だった。しかし、気になるほどの長さではない。

平日の午前中には、スイス側から出国するよりイタリア側から入国する車の方が断然多い。

「何をしているの？」

「あー あれ。彼らは、ワインとか、生ハムとか、チーズとか、たくさん、食べ物、載せてきてる」

物価のより安いイタリアからなら、大量の物資を運び込む労力は多少の関税を支払っても報われるのだろう。

促されるままパスポートを差しスイスから出国する。マリオと一緒に来たからなのか、出国スタンプすら不要とパスポートを戻されるとゲートを潜った。その先に待ち構えるイタリア側の役人にも同じようにパスポートを渡す。入国スタンプを押されてから受け取る。目的地への軽い質問などがあり、おざりな荷物検査を受ける。不審者も不審物もないと判断されて、赤白のボーダーに塗り分けられた横棒が踏切のように下りている簡素なゲートが上がるのを待つ。車は真下をゆっくり通過し、国が違っている。

イタリアに入ったなと感じさせられたのは、幹線道路の広さと交通量の変化だった。目指すは北部イタリアの大都市ミラノである。見る間に交通量が増える。街が近づくのが分かる。

「どこ、行けばいい？」

「ミラノ駅。ツーリスト・インフォメーション。ホテル、探す」
単語の羅列を繰り返しながら会話していた。

駅の両替商で換金し、大量のリラ紙幣に驚く。戦後にインフレしたのは日本だけではない。

安ホテルに無難に落ち着く。荷物を置いてマリオには車を駐車させた。

二人で街へ出る。ドウオーモの広場やアーケード街を眺めて歩く。カンパリソーダやカンパリオレンジのスタンドが物珍し

い。ソーダは派手に泡立てて、生のおレンジも使って作っている。暑いのでやけに気になった。

「何か食べましようよ」

昼食には遅すぎるくらいである。空腹だった。片手には、スーツケースから出してきた六ヶ国語会話集が握られている。イタリア語も入っていた。

イタリア語で「私」は「イオ」という。初めて知り初めて使う。マリオが嬉しそうだった。メニューは任せたと頼む。

美味しいプロシユートやパスタや肉料理と気取りのない赤ワインが運ばれる。嬉しかった。二人とも満腹した。

レストランを支払った。彼は困った顔をして従う。札を言われて首を振り、怪しいイタリア語で叫んだ。

「グラツチェ。タント グラツチェ！」

見つめ合った。頬と頬を交互に重ねる。抱擁した。

マリオの眼が語る。短い時間だった。

大したことではない。けれども、難しい決断だった。

笑顔で別れた。

夜になると、初めから独りだったのに、その晩のミラノはもうにも寂しくて仕方なかった。

——いい眼をしてたなあ……

ぼんやり物思いに耽っていると、目的地が近いと気づく。既に夜中である。少し前にニースを過ぎている。車内が再び活気

づいていた。降りなくちゃ。

これから、しばらくは暮らすことになる町に着いた。

世界的に名が知られている割に、こじんまりした港町である。もはや漁業よりは観光で栄えていた。ヨットハーバーもあり音楽祭も映画祭も開催される。知識は、それくらいだった。

フランス語の初歩を教えてくれたドイツ語教師ベルナルドの奥さんブリジッタは、南仏へ行くよと告げるなり夢見るような表情をした。夫婦そろって羨んだ。

「どこがいいかな？ エクサン・プロバンスがお薦め？ ニースよりはカンヌの方が町が狭くて楽かもしれないね」

「アツコ、どっちにしたって楽しそうよ。いいわねえ」

「えへへ。そうかな」

笑って誤魔化している。

カンヌ駅の裏手にある女性専用の宿舎に、フライブルグから冬物衣類など必要となる荷物は送っていた。しかし夜中にチェックインは無理だろう。ところが自分はフランス・フラン紙幣への両替を忘れていたのではないか。マズい。これでは飛び込みでホテルへ入るのも気が退ける。

簡素な駅前には、大丈夫そうな安宿があった。

フライブルグで買っていた旅行ガイドブックで地図を確認し、おそらく海の方へ向かうだろう道を選んで重いスーツケースを引きずり歩く。

ここには、きつとりリッチなホテルが建っている。そこを目指す。浜辺にはあるだろう。

海沿いの大通りへ出た。最初に目についた煌びやかな豪華なホテルに向かう。入るには少し勇気が要る。玄関には可愛いドアボーイがいて荷物を持つとした。それを、やんわり断る。怪訝そうな顔をされるが構わず中へ入る。静かな広いロビーでは一斉に、その場にいるホテル従業員全員の視線が集まる。痛い、と叫びたいくらいだった。

フロントへは向かわずにヘコヘコした低姿勢のまま両替のカウンターを探す。良かった。確かにある。

ジーンズにノーメイクの若い貧乏そうなアジア女性が荷物を持って夜中に現れ両替を求める。ただ、それだけのことだ。

理由が判れば緊張した雰囲気は弛んだ。動作の一部始終を監視されるような状態から解放された時には、おそらく笑いが背後で起きていたことだろう。

駅前までさつさと引き返し、見当をつけていた安宿を試してみる。

閉店したばかりのレストランが一階にあり、ホテルのランキング指標とされる星マークは一つも付いていない。でも一泊だけだし、探し回るのは面倒だった。

「アロー」

呟くように声をかける。

薄暗いレストランのバーカウンター内側に男性がいた。

「今夜、泊めてもらえる部屋はありますか？」
教科書通りのフレーズを試す。

「ウイ マダム。お一人ですか？ 一晩だけね？」

本気なのかどうか見透かすような眼が気になるが、返事はまともだと解釈する。

部屋のダブルベッドのカバーがショッキングピンクだった。

なんだろ、これ？ 少し不安になる。

シャワーを浴びて、ビールを飲もうと階下のレストランまで降りた。

常連らしい数人の先客がいた。バーカウンターに陣取りホテルの従業員と談笑している。

「ビールをください」

洗い髪のまま笑顔を造ると早口で言った。簡単なフランス語である。ストラスブル産の瓶ビールを受け取るとコップに注ぐ。少し落ち着いた。

同じバーカウンターの隣にいる彼らと目の前に立つホテル従業員が、さつきから熱心に観ている雑誌のようなものが気になる。隣の男は、真っ黒いレザージャケットをびっちり着ている。ホテル従業員は顎の髭剃り跡が青々としていて、どこか物腰が女性的な気がしてならない。

意識していたのを見透かされ、彼らは雑誌をわざと見えるように回してきた。

白人と黒人とアラブ系らしい男性モデルが裸で別の男性モデル

ルと性交する写真や、エレクトロした。ペニスを強調するアップ写真ばかりが載っている。一部モデルのファッションが、やはり黒いレザージャケットや銀色のチェーンを身につけたスタイルだった。

努めて平静を装う。ゲイたちの好奇の視線が注がれる。

せつかくの好意に甘えて、しばらくパラパラとページをめくる。それから、なんだこんなもの見飽きてるさと、さも興味なさそうに写真集を返す。

あれ？ というような拍子抜けしたムードが漂う。それでも彼らは何事もなかったかのように、また自分たちだけの話題にすぐに戻る。女には興味がないのだ。

ビールを飲み干したので「ボンヌイ」と誰に言うでもなく、おやすみを言って早々に部屋へ引き上げた。

とんでもない処へ泊まったな。ここは日本なら、ゲイ専門のラブホテルのような役割のホテルだろう。

はあー やれやれ……

それでも、彼らゲイたちを嫌うような感情はない。

同じ人間同士、趣味嗜好が異なるだけだ。異性が好きなのも同性が好きなのも好みの問題だし、他人が口を挟める事柄ではないだろう。彼らは生き難いだろうが自分で選んでいる。積極的な応援もないが否定する気も起さない。そういうニュートラルな姿勢を崩す気もなかった。

心なし、隣室や上下の部屋の物音が気になる。なんだか寝つ

きが悪い。それでも長旅の疲れは、いつしか深い眠りへと誘う。真ん中が大きくへこむ、いかにも寝にくいダブルベッドだった。

同じ階下のレストランでフランスパンとコーヒーだけのシンプルな朝食を摂った。夜に見た淫靡さは跡形もなく、ごく日常的でありふれた光景があった。

チェックアウトして駅前で、手持ちの現金紙幣ほとんどをフランに両替してしまう。それから、駅の真裏の山側へ回った。

宿舍の予約は完了していたので、本人が到着するのみになっていた。面倒な作業は、その大部分をフライブルグでフランス人の母親を持つブリジッタが手伝ってくれた。代わりに彼らの子供のベビーシッターも任されたが、それでもお世話になった彼女には別れ際に、母から持たされていた濃紺の浴衣と簡単に身に着けられる黄色い帯のセットに下駄まで付けてプレゼントした。大げさに感激してくれた。金髪の大柄な彼女に良く似合った。

宿舍の事務の女性に促されるまま入居するための書類に署名などしていく。前家賃の支払いも済ます。

一階は広くて明るいキャンティーン・スタイルの食堂である。多くはない入居者だけでなく近隣の住人や勤め人も利用できるよう配慮されていた。回数券のような食券の綴りを買うよう教えられる。

指定された二階の部屋は個室で、狭いが清潔である。作り付けのシングルベッドと洋服を掛けるスペースと、衣類ダンスに粗末な机と椅子もある。フランスなので洗面所には必須のビデもあった。間仕切りや窓に下がるカーテンの色は明るく淡いグリーンに統一されている。どの部屋にもドアと向き合つて窓があり、その窓から正面の道路が見渡せた。

ドア側に廊下がありトイレとシャワールームとランドリーは共同である。廊下の突き当たりには外線にも繋がる共有の内線電話器のようなものが置かれていて、掛けることも外部からの連絡も受けられた。ベルが鳴れば気づいた者が受話器を取り、電話の相手が要望する人物に取り次ぐ。実に公平で合理的かつプラクティカルである。

同じようなフロアーが上にもあり建物は四階建てだった。外国人が多かったがフランス人も入居している。

定期的な室内までも掃除婦が掃除する。掃除の嫌いな入居者には助かるサービスである。

フライブルグから送った別送品は無事に着いていた。部屋の中へ持ち込む。持ち物の多くを日本へ送った残りなので気分的にスッキリしていた。

三日後にはフランス語学校の新学期が控えている。それまでに、まず銀行へ行き口座を開く。日本からの仕送りを受け取るためだった。

二十歳になると、東京での成人式にも振り袖にも何の感慨深

さも興味も持てなかったものの欧州滞在が二年半を過ぎて少し里心が募り、二月に一時帰国している。

都内で勢力を振るう暴走族グループで粹がっていたアキが傷害罪で少年鑑別所へ入っていたことも、フミオが二十歳でさつさと結婚したことも聞いた。イトちゃんは、フミオの友達で同じ暴走族グループにいた、横浜中華街の裕福な華僑の息子と付き合っていた。

ちょうど妹の大学受験の結果発表の時期とも重なり、試験に自信を持てなかつた彼女に頼まれ、武蔵野の奥地まで四年制の美大の入試発表を確認しに付き添った。

「ないねえ」

近眼の妹に代わり受験番号を掲示板に探したが結果は不合格だった。

妹は落胆し浪人を決めた。美大の付属高校へ通っていたがデザインを専門に勉強するためエスカレーターへの進学を断念し女子大よりは共学の有名校の方へ気持ちしが傾いていた。

入試の要らない都心のデザイン専門学校への入学も彼女は選択肢に挙げたが四年制の名の通った大学でなければ学校に非ずと取り合わない頑迷な母親を前にして、妹の意欲は失われる。

身勝手なプレッシャーをかけられ彼女は萎縮した。

一方では、ドイツ語の習得が順調だったため帰国の時期を話そうと考えての一時帰国でもあったのだが、

「ナオコの受験勉強の邪魔になるから、来年まで帰ってこない

で！ あんたがいると、うるさい！」

そう、母からキツク言い渡される。

「わかった」

それなら最後には、もともと興味を惹かれていたフランスへ
移り少しフランス語も習って帰ろう。どうせ自分には居場所の
ない家だ。母は妹との争わぬ快適な生活を望んでいる。

西ドイツでの倦んだ暮らしには、春からは潮時という風が吹
き始めていた。滞在ビザの延長も不可能だった。短期間でない
なら、パリへ移り滞在するのも魅力的ではあった。だが意識の
隅に帰国がある。

カンヌへ来たのは、そうした経緯からだった。

最寄りの警察署へも立ち寄る。

イギリスや西ドイツでの滞在経験から必要だろうと判断され
ていた。

最初に応対してくれた窓口の警官では言葉が通じない。ドイ
ツ語の話せる者がいると若い刑事科の刑事が選ばれた。しばら
く待たされ、何のご用でしょうかと刑事のピエールは緊張ぎみ
にドイツ語で挨拶した。

「グーテン ターク！ 実は、昨日この国に着いたばかりで、
しばらく滞在する予定です。ついては、長期滞在するのに何か
登録とか保険を掛けるとか必要な作業があるのではないかと思
います。そうでしょうか？」

「日本から来ましたか？」

「いいえ、西ドイツから来ました」

「それでは、我が国では何も出来ません。一度お国へ帰って大
使館を通して出直すしかありません」

「あら！ そんなことは出来ませんよ！」

「大丈夫。ちよつと出なければモナコもイタリアもあります。
必要なら、行つて戻つてくれれば良い」

そう声をひそめるなり彼は軽くウインクした。

ラテン系の気質だな。間違ひなく島国のアングロサクソンや
ゲルマン系より、暢気のんきで気楽な体制は融通が利く。

「それでいいなら、そうします」

苦笑しつつも目を見張つた。

「ところで、お住まいはどこへ？」

「すぐその駅裏のロジーに住んでいます」

「ロジー ドウ ジェンヌ ドウ プロバンス？」

「はい、そうです」

「どうか。今度、食事でも？」

「ええ、いいですよ」

堅物そうだが、最後にくだけた口調に変わったピエール刑事
には丁寧な礼を言う。印象は決して悪くなかった。

それにしても、刑事でもナンパかよと気色ばむ。
とかくラテン気質には、おいおい慣れるしかないだろう。

夜には、日本へ出す手紙を久しぶりに書く。

移動する旅行中の出来事や、カンヌに着いてから起きたことや口座を開設したことなど連絡事項がメインである。

母には、極力心配させまいと気を配る。ずっと離れているにも拘らず面倒な問答に引きずり込まれかねない。いつも居たまれぬ嫌な思いを味わうのは立場の弱い子供の方なのだ。留学生活のスポンサーではない父の方へは、さらに素っ気ない手紙を書く。

寝る前に、そうだ、明日はポータブルラジオを買おうと決める。音楽が身近にない生活はどうにも落ち着かない。

翌朝は海を見に行った。明るい色の海である。まだこの時期に泳ぐ人もいないではない。トップレスの白人女性が日光浴している光景も地中海のリゾート海岸に於いては驚かれなくなっている。

小さな桟橋から観光ボートに乗り目の前の島へ渡る。

サント・マルグリット島の方には、謎めいた鉄仮面が幽閉されていたと伝わる。高貴でも、不自由で孤独な身の上を本人はどう受けとめ生きたのか……

電器店を見つけて手頃な白いプラスチックカバーのラジオを買う。安かった。絵葉書と切手も大量に購入した。報告する相手が多い。

ロジエへは戻らず、遅めの昼食を摂るため駅前の、泊まった安ホテルのレストランへ向かう。店内は、そこそこ賑わっている。

た。山盛りの蒸したムール貝を前に黙々と独りで頬張る老婆がいる。

カルテが読めないため困っているとウェイターが気軽に英語で話しかけてきた。

「お手伝いしましょうか？」

「え。あ、ありがとう。では、これは何の食べ物ですか？」

久しぶりに聞く流暢な英語は嬉しい。彼は分かりやすく、それぞれの商品を説明する。

スリムな長身で浅黒く均整の取れたムスリム系ハンサムだった。きつと親切で優しい素直な性格をしている。深い意味はなくそう思った。

白ワインと魚料理を頼み、ワインを少し水で薄めつつ満足して食べた。

何かが聞こえ反射的に顔が向く。斜向はずかいの席で、同じウェイターと客のカップルが話している。不自然な大声を出したのはウェイターだった。

カップルがにわかに男女とも手を挙げ笑顔を送ってくる。意味が分からない。

客である年配の男性から強くけしかけられたウェイターは意を決したように舞い戻ってきた。早口の小声で、

「あそこに座る二人が今夜あなたと自分と四人で……スワッピング・パーティをしないかと訊いています」と告げた。かなりな問題発言が含まれている。そこだけは彼も些か躊躇していた。

「えっ?! 今なんて?」

目の前の端正な彼の顔と離れた場所に座る人の善さそうなカップルの方とを見比べる。ウェイターの顔は色白ではないのに赤くなっているみたいだし、カップルの方は、ますます親しみを込めた笑顔で手を振る。

「いったい、どんな振る舞いをしていれば、こんな非常識な質問をされずにいられるってんだらう。スワッピングってしたら、やっぱアレだろう……」

目の前にバツが悪そうに立つ若いウェイターを睨むようにして訊いた。疑う余地のない返事を彼は期待していたらう。

「あの人たちは、どういう人たち? 良く来るの?」

「はい。男性の方は、かなりな常連です」

「そう……それで? あなたも一緒なんですか? その、今夜?」

「え。はい、僕も、その、一緒です」

「そうですか。では、少し考えさせてください」

驚いていた。すぐにウェイターはカップルの席へ報告に行く。考えをまとめるのに十分くらいは必要だった。

ウェイターを呼んだ。名前を訊く。

「ではマジエディ、受けます」

びつくりした顔でマジエディはすぐに二人を連れてきた。

彼らの名前は男性の方がアンドレ、女性はマリーと名乗った。

二人とも英語も話す。

約束の夕方四時にロジの玄関前にいるとアンドレがピツクアツプにきた。たとえようもなく美しいマリンプルーのフェラーリを運転している。それほど車に詳しくはなくてもフェラーリは知っている。

なにげないフリをしたが、金持ちなのかと読む。

車高の低いスーパーカーは、あらゆる通行人から見下ろされるように感じる。

「みんな、見ていますよ」

アンドレは軽やかにいなす。

「君が美しいからさ」

返す言葉がない。イギリス人やドイツ人の男性からはまず聞かないキザなセリフに思える。

フェラーリのエアフォンの音がファアアーンと甲高く華やかに轟く。正真正銘の未体験ゾーンへ突入したと観念した。

思いついたというようにアンドレは避妊しているのかと訊いた。

もうピルは飲んでいないと正直に告げる。

「恋愛には懲りたよ。しばらく恋愛からは遠ざかりたい気分です。もう、ね」

乾いた笑いがこぼれた。

すると彼は、それはマズいよ、君は愛の国フランスへ来たんだぞ、ここは愛の国なんだぞと真顔で脅す。大人の男の観念からも、知り合ったばかりの若い女を正確に窘める。おそらくそ

うだった。アンドレは、そういうところは正直な感性の持ち主だった。

そして彼は、さつさとコンドームを買ってきた。

目指す住居はカンヌから、香水の産地として名高いグラースの方へ向かった高台の丘陵に建っていた。

一家に名前が付いている。

Gift of the Wind

スペイン風の、白い漆喰壁に明るい茶色の瓦屋根が載る平屋の邸宅にはコの字型の中庭に屋外プールが設けられている。水の中の照明が点くと、雲形定規のような湾曲した輪郭のプールは誘うように頬笑むように穏やかに波立つ。微風が吹いていた。

「泳いでもいいよ」

「んー でも水着が」

「そんなもの、いらなんでしょう？」

確かに。どうせ裸にはなるのである。

カンヌ郊外の初秋の日射しは夕方になっても、まだ真夏の名残を落とす。

隣家は遠く、地域が別荘地エリアと知れた。

「まるで、お魚のようだね」

歯の浮くセリフを聞き流す。

素っ裸で気ままに泳いだら、台所でアンドレが市場から仕入れてきた片口鰯の下拵えを手伝う。平たい木箱から出して洗い

鱈を取り軽くわたを抜く。塩を振ると彼がプロバンス地方特産の乾燥ハーブミックスと強く香るオリブオイルを、ざつくりと大量に振りかけた。そのまま、プールサイドでパーベキューする。他に有頭車海老と、新鮮な殻つきの生牡蠣に真っ赤なトマトのサラダ、フランスパン、程よく熟成したブリーチーズや高級シャンパンもある。シャンパンは、カシスを加えて美しいピンク色のキールロワイヤルにする。

「そろそろ来るだろう」

マリーとマジエデイが到着する車の音がした。

食事をして語り、アルコールが入り少しタガが外れる。商売ではないので金のやり取りはない。嫌なことをされたら拒否する権利もあった。

適当に組んで相手を代えて、そしてインターバル。また飲んで、喫煙して、また、やる。

ふいにアンドレがマジエデイの行動の何かを叱責した。

「もう帰ってくれ！」

突然だった。マジエデイは不服そうな表情をしている。けれども彼は、アンドレの怒りが拡散するのを避けるかのように、「先に帰るけど、あなたは大丈夫ですか？」と冷静な気遣いを見せると、さつさと服を着て出ていった。

これが、この国流なのか？

白人には無理に逆らわぬよう、彼らのような立場の脆弱な、

植民地だった地域からの移民であるアフリカ人たちには意識の中に特異な遺伝的プログラミングされたものでもあるのだろうか……

理由はさっぱり分からなかった。

アンドレはぶつぶつと、ここは俺の家だと言い続ける。

ここで帰ってしまったては参加した意味がなかった。まだ、分らないことだらけだった。

マジエデイだけが去り、二人の女はあやすようにホストのアンドレに奉仕した。

彼は起きてからも渴いていた。髪も薄く腹もせり出した三代後半の男性にしては勤勉である。夜から数えて三度も射精した。

マリーを最寄りのバス停まで彼が車で送る間に、また少し泳ぐ。彼女も疲れて見えた。

——この静かな家は、これまでもずっと、こんな使われ方なのか……

こんな郊外の広い家に独りで住んで、あの男は果たして寂しくないのだろうか。

アンドレが戻り少し話す。断りなく後片付けを始めていた。目を細めて彼が見守る。中くらの太さの高級なハバナ産の葉巻を冷蔵庫から取出すと、彼はゆっくり火を点けた。

イギリス女性と結婚していたが既に離婚していた。幼い一人

息子がいる。息子とは離れて暮らすことになった。離婚は、彼の方から望んだ結末ではないと分かる。

「別れた元妻のことは仕方ない。だがオリバーは……俺の子だ。俺にも育てる権利がある！」

「分かりますよ。その通りだろう」

「昨夜、あの男は、息子の……」

「それってマジエデイのこと？」

「そうだ。マジエデイは、触れてはならない大切なものを不用意に触った。だから帰ってもらった」

「そうだったの、それで！ でもそれは彼も知らなかったでしょうにね」

アンドレは黙って俯く。

目の前の、まるで天皇のように許された振る舞いをほしいままにしていた男が小さく見える。小さな、かわいそうな男の子のように思えてしまう。

この家には名前が付いていた。

風の贈り物

幸せな時につけた名前だったろう。

「もう俺は独身に戻ったんだ！ いくらでも好きなことが出来る！ 誰も文句を言わないさ」

その笑顔の仮面は似合っていないぞと、そつと教えてやりたかった。

マリーの恋人は遠洋航海船に乗る航海士で、たいがいは海の

上にいる。彼女は寂しくて、たまにアンドレたちに抱かれる。恋人の男は何も知らない。そんなような説明もされた。

フランス語を習うカレッジへは徒歩で向かう。カンヌ市街地の西方ニキロメートルほどにある。陽光に満ちた開放感のある玄関前に着いた。

入学手続きを終えると記念撮影が待っている。年齢の幅が広いクラスメートは北アメリカ大陸やヨーロッパ各国からの白人が占めていた。イギリスや西ドイツで在籍したクラスよりも比率が高い。

三学期制の授業料の一部を前納する。ロジーでの支払いのと同じように、いちいち目の前で偽札鑑定器にフラン紙幣を透かし確認していた。

事務の女性と面会して、あつと驚く。ロジーで最初に部屋まで案内してくれた人が目の前に座っている。赤毛で、大胆なソバカスが魅力的な小柄なグラマーである。

「そうなの。あのロジー住まいは、もう三年くらいね」

今にも、あの日の自分は休暇中だったと弁明するかに見えた。実は、誠実でシャイなんだろう。かなりな話し好きだが、はっきり物を言うコレットの人柄は受け容れられる。

キツイ訛りのある英語でも積極的に話すところが愛嬌だった。

*

今夜もまた、ジャックのピアノバーへ行く。不思議な因縁である。

カンヌで最初に入ったバーだった。なんとなく敷居が高そうなので不向きならすぐに出ようと勇気を奮う。店はロジーから近い。

薄暗い店内は空いていてサービスに現れた年配女性に、遠慮がちにジンフィズと小海老のカクテルなるものを頼む。料理の内容を知らなかったため良く確認した。

ジャニーヌは、おぼつかない怪しい英語で、その食べ物は複数の小海老がマヨネーズソースを囲みカクテルグラスに盛られていると説明する。高価だが、味わい深かったのを覚えている。

高級なバーに小娘は似合わない。すぐに会計した。すると帰りざわ彼女は、

「ニホンジン？ ニホンをしってる。ギンザ。ラモール、ハナネズミ、それから……」

いきなり日本語だった。しかも内容にぶつ飛ぶ。なんで、その名前が出るのか、しばらくは口が利けない。耳を疑う。

「あの……？ ラモールも花ねずみも……なぜ知っているんですか？」

かろうじて反問した、日本語で。理性は、あり得ないと否定したがっている。

「ジャックもワタシも働いてたよ。ラモールでも、ハナネズミでも」

「えっ!？」

「コマーシャルしってる？」

「え？」

「サントリージンのコマーシャルね」

サントリージンのコマーシャル? 待てよ……

子供の頃にテレビで観た記憶がある。

——ジンジンジンジン—— サントリージョン……

といったフレーズが蘇る。モノクロ映像だったので白黒ボーダー柄の囚人服を着た白人男性が、コミカルな演技をして走り

回る。

「知ってる! そのコマーシャル知ってますよ!」

叫んだ。混乱して英語が混じる。考えるより先に早口で言葉が飛び出た。

「わたしの母はラモールでも働いてたし、それより花ねずみは…… 花ねずみのママは母です! イマデヒロコ」

「まあっ!」

彼女も驚く。すぐに、ピアノの前に座っていたパートナーを引っ張ってきた。日本の洋酒会社サントリーの初期のテレビCMにも出演した男、ジャック・ヴィアルである。カンヌ出身だった。

これより九年前の大阪万博の年にジャックは日本でレコードデビューも果たしている。

当時の母は、それよりも前から大阪の北新地と銀座にある高

級クラブのラモールで継続して働きトップセールスのホステスとなると、死んだ鼠という意味のフランス語「ラ・モール」から暖簾分けした銀座7丁目の高級クラブ花ねずみの初代マダムを拝命し精励していた。飲食産業チェーンに発展した親会社からマダムとして雇われていたのである。高給取りだった。

たとえば海外赴任している日本人商社マンのエリートの中から出た店名なら、容易に納得する。しかし違った。うるたえた。

滞在生活は落ち着いてきた。

朝は早起きして、通学途中で焼きたての匂いに誘われるまま勤勉なパン屋のクロワッサンを買う。フランスのパン屋は日本の豆腐屋のように早起きである。溶けた板チョコ入りのシヨクラを好んだ。同じ一個のクロワッサンにもバターを使用したもの、マーガリンを使用したもの、どちらかを選べる。

授業は午前中だけで午後は自由になれた。真面目にフランス語を習っても、どうせ途中で帰国すると思うと身が入らない。遊びに来ていたのだと少し投げ遣りだった。

ぶらぶら海を見に行き、フランスパンにハムやチーズとバターを挟んだだけのシンブルなサンドイッチを頬張り、オレンジ味のビン入り炭酸飲料を買う。歩き疲れるとカフェでコーヒを飲んだ。

駅前の売店で、読めもしないル・モンドと英字新聞のシカゴ・トリビューンも良く買った。

世界情勢が激動している。中国で、名前の通り小さな男が活躍していた。

コンチネントはアフリカともアラブ世界とも近い。ウガンダのイディ・アミンはイギリスから見放されて遂に逃亡するしかなくなり、中央アフリカ帝国なんて皇帝もろとも盟友のフリをしていたフランスに愛想つかされ倒される。

一方では、派兵しない約束に守られる平和で穏健な仏教国としての金持ち日本は世界政治の表舞台から遠く傍観者だが、ひとえにパリコレで邦人デザイナーたちが存在を認められている現実が見える。

アンドレはたまにロージーに電話してくる。

「アロー？ マ ペティ ジャポネーゼ！ 元気？」と彼は勝手に「僕の日本人の女の子」と呼ぶ。

デートして食事したり家へ泊まったりした。

彼がクスクスを食べたと、真つ先に連絡がくる。

「俺はアルジェリア育ちなんだよ。フランス領だったアルジェで育った。だからアフリカ料理のクスクスが無性に食べたくなる時がある」

「クスクスって何？ どんな食べ物なの？」

「そのトマトシチューの方を、そっちの小麦粉で作った粒々にかけて一緒に食べるんだよ。ちよつと辛いよ」

カンヌで一番だと彼が太鼓判を押す庶民的なレストランで、生まれて初めて北アフリカ料理のクスクスを味わう。

イギリスにあるファミリープランニングのような機関を見つけて受診し、避妊ピルを手に入れ服用した。

彼は、上質なコットン素材のピタツとしたボクサーパンツを着脱する。薄い素材のスラックスでも下着のラインが外側に映らない。初めて眼にする男性下着だった。

マジエディとも会っていた。

ウェイターの仕事だけでなく、すぐ近くのボルノショップの店番もやり深夜も働く。チュニジアからの国費留学生はニース大学で医学を学ぶ。

医学部と聞いて、ああ、だから知的で冷静なんだなど洞察する。金もかかるだろうが簡単には放り出せない誇りと意地も見えた。それでも若い彼は、特に表情を変えなかつた目の前の若い女に少し驚くと落胆した。

アンドレとも楽に話せたがマジエディとは、それよりも親しく話が出来た。頻繁にボルノショップの方へも会いに通う。それでもマジエディと再び性的な関係を持つ気は起きない。彼は望んでいた。それは知っていたが、健全で真面目な男を翻弄するのは好ましくない。彼とは友人として付き合いたかつた。

アンドレは多くの役立つ情報を伝えてくれる。話術も巧みだつた。さらに傷つくのを避けて生きているのは少し痛々しい。

「君がいた駅前のホテルのレストランはね、カンヌでも美味いと評判の店だ。ゲイの溜り場だが、そんなことは料理とは関係ないだろう。でもあの日、あの店へ入ったことが君の運命だな。」

まさに運の強い娘だ」

手を握り強くウインクしてみせる。

刑事のピエールとも二回くらいは食事へ行った。

象牙色の小ぶりのシトロエンに乗り迎えにくる。幌を外して

オープンにした開放的な軍用車タイプの車体は趣味が合う。

フランス男性にも彼のような誠実で当たり前に親切な人もい

ると思うと気が楽になる。単にドイツ語を気兼ねなく話す相手

が欲しかったのだろう。

地域名物のニース風サラダを頼んでくれた。ツナがたくさん

載っている。

ヴィアル夫妻が経営するピアノバーへ行くと、すぐに日本へ

コレクトコールした。

「もしもし、おかあちやま？ あのね、こっちでジャックに会

ったよ。ラモールや、花ねずみでもピアノ弾いてたって。コマ

ーシャルに出てたジャックだよ！」

「ええ？ ああ、ジャック・ヴィアル！ そういえばカンヌだ

ったわ」

「でしょ。驚いたよ。それでね、クリさんっていう人もいるん

だって、知ってる？ こっちでフランス人と結婚してるの。一

緒に働いてた人みたいだよ。知らない？ 今度会うんだけど」

「クリちゃんね、知ってるわ。あんまり頭が良くなかったわ。

確かに、そっちへ行ったわね……」

遠い記憶を、母は電話の向こうで辿るようだった。

「そうなんだ。でも知ってるんだね。会ってみるよ」

「そう。よろしく言つといて」

「うん」

長電話は料金が高くなる。元氣だと告げて、そそくさと切つ

た。

電話では言いだせなかったが母はなぜ、娘がカンヌへ行くと

知っても、たとえばジャックのことも同僚だったという女性の

ことも何も思い出さなかったのだろうか……

つい七年くらい前には、会社からプレゼントされた慰労旅行

の団体にニースにも立ち寄ったと聞いている。

忙しいから忘れていたと言われるだけなので訊いても意味が

ない。素朴な疑問はチクリと胸に刺さっただけで、すぐにどう

でもよくなった。

クリさんを訪ねる。マダム・カンパナは歓迎してくれた。

夫のムツシュー・カンパナが地元でテキスタイル関係の会社

を経営し、ジャックとは古い友人だった。その縁で二人は日本

で知り合い結婚する。

ジャニーヌから連絡されていたため、

「まあ、ヒロちゃん、あ、お母さんに良く似てるわねえ。いら

つしやい」

クリさんは眼を細める。

子供のいない夫婦は、カンヌの美しい海を見下ろす高台の高級マンションで優雅に暮らす。

東京のフランス大使館勤務だった男性と結婚しカンヌに永住している、上品な年配の婦人も来ていた。

クリさんの家で、その当時のカンヌには、たったの七人しか日本人が滞在していないと知る。学生が多く住んでいたニースとは違った。

西ドイツの古い町フライブルグにも、それほど多くの日本人は住んでいなかった。それでも七人という少なさではなかったし、そのほとんどは学生だった。

カンパナ家に集う女性三人を除くとカンヌには、油絵を描いているヤマシタ画伯、ちっちゃな日本食レストランを営むショウさん、フランス料理の修行に來ているコック見習いの若いコンちゃん、同じくコックのフチガミさんだけである。

ショウさんの店は知っていた。旧市街ル・スケの中央を貫く坂道にあった。

「サミュライ」とフランス風に読めるローマ字の店名が目にと留まったからである。

ピアノバーに続いて出入りするようになる飲み屋が他に三軒あった。

夜は、いずれかのバーやパブへ出かける。常連になれば嫌がられずに飲ませてもらえた。その日の気分で適当にハシゴして

飲み歩く。

仕送りに支えられた気ままな生活にも終わりがくると分かっていた。

何かを始めて締め括るには、それ相応の成果と納得と理由づけが自分に要る。それこそ、支援した人への、当たり前前の礼儀もあつた。放浪してきた意味を己れに問いかけることが必要となる。

ロンドンで見かけた、根なし草として暮らす同胞みたいな生き方に魅力はない。

自分の居場所はどこなのか。
どこで人生をやり納得すべきなのか。

答えは簡単に出ない。

ミツシエルと出会う。

「君って、モジリアーニの絵に出てくるモデルに似てるね」

キャットシュオンデリバリーの立ち飲み客でゴった返すパブのカウンター前で彼は、その人混みからすり抜けるようにしてワイングラス片手に真っ直ぐ眼を見て話しかける。

「はあ？ ノン、ノン」

モジリアーニの絵は知っていた。モデルは常に不幸せそうな顔をした痩せた細い女だろう。似てないではないか、何を言っている戸惑う。

巧くフランス語で説明できない。すると、

「モジリアーニを知らないの？」と誤解される。

「ウイ！ モジリアーニは知ってる。でも違う……」

どうも噛み合わない。フランス語しか解さない人なのは分かった。

「あの、自分は、今夜は行かなくてはならない。次の木曜の夜には、ここで会える？」

「木曜ね？ いいよ」

曖昧に頷く。

安っぽい木綿の作業着に似た上着に、よれよれのジーンズを若者みたいに着崩している。たとえば暮らしに疲れた人のようにも映る。だが彼の瞳には惹きつけられた。美しい榛色はしごの瞳が見ている世界。その奥に棲むものを感じてみたい欲求に駆られる。

約束の木曜には伝言だけが待っていた。

その翌晩にはミッシェルはバブに現れる。

自然に手を繋ぎバブを出てレストランへ移動した。

ヨットハーバーのある湾の外れに面したイギリス風バブから、旧市街ル・スケは近い。レストランは日本食のサムライからも近かった。

個人の居間に招待されているかのような錯覚をさせる雰囲気がある。まるで会員制のように常連しか訪れない。

ラウンジの応接セットでアペリティフを飲みながら話し、軽く食べてもいい。顔馴染みのメンバーが揃えば大テーブルへ移

動し、家族のように議論しながらメインを食べる。

食事とは、ただ食べるだけではなく話すことも食事なのだと気づく。そして正しいデザートとは、どんな状況でもパートナーの存在を忘れないで意識し気遣う優しさなのだと分かる。

ミッシェルは議論を避けなかったが、テーブルの下の手も離さなかった。その温もりを通し、言葉には頼らない確かな情感を受け取る。

カルテには「火に掛けた鍋」と書かれている。

「美味しいよ」と勧められ頼む。

出された料理を見て笑った。フランス語でポット・オー・フーは日本でも食べられるポトフである。おでんのような野菜料理だ。

「知ってる」と自信満々だった。

「アレ食べなかったの？」

「アレって、骨？」

「そうだよ。あの骨の中の髄を食べるべきなのに！」

「えっ！ 知らなかった……」

皿は下げられた後である。そこまでの知識がない。

ミッシェルが愉しそうに声を上げて笑う。笑うと目尻に深い皺が寄り緩んだ、赤子のような無垢な表情になった。栗色に近い金髪の巻き毛が揺れる。

悔しいが、つられて苦笑した。

テーブルには甘いデザートの前に、チーズと、シャルトリュ

ーズやコニヤックなどのデジエステイフが用意される。

こんなに気持ちのいい食事は何年振りだろう。自分が試され大切にされようとしているのが分かる。

アンドレはミュンヘンのオクトーバーフェストへ行くと言う。

「楽しんできてね」と告げると、

「土産は何かいい？」と訊く。

豊富で並外れた外国語のスキルを駆使して彼は、不動産ブローカーとして稼ぐ。ターゲットの顧客のメインは資産家のドイツ人たちである。北に住む人たちは温暖な地に別荘が欲しい。そこにニーズが生まれる。

「私に物は要らない。土産は何も欲しくないけど、もしもあなたが少しでも私のことを思ってくれるなら、私を思い出して絵葉書を書いて送ってよ。その時間だけは私のものですよ？」

「絵葉書？ いいよ。でも本当に、それだけでいいのかい？」

「いい。絵葉書が嬉しい」

「ふーん、変わった娘だ。了解」

たらふくビールを飲んで楽しんでますといった文面の絵葉書を、彼は約束通り送ってくる。

きつと彼には本質は伝わらない。でも自分に出来ることはしあげたかった。

ミュンヘンから戻ってくるとアンドレは、しばらくして食事しようと電話をくれた。会いに行くと初対面のドイツ男性も同

席している。

三人で元気に食べて飲んで、気づいたら両脇を男性に挟まれベッドへ入る状況となる。

「あなたは、何も言わなかったよね、アンドレ」

「別にいいじゃないか」

「いや！ 何がいいのさっ！」

「ごめん」

上半身裸で反対側に寝そべるドイツ男性は紳士らしい。黙って聞いている。

「悪いけど、私はあなたが好きなので、好きな人の前で別の人に抱かれるわけにはいきませんわ」

「ああ、なら、俺を殺せ！ 殺してくれよー」

アンドレは照れて、ふざける。馬鹿馬鹿しくて爆笑した。

三人の大人は喧嘩することもなく子犬みたいにくっつき合っ

て寝る。
「なあ、俺の立場はどうなる？ きつと楽しいよ？」などと無駄な抵抗をされても黙殺した。

それ以降のアンドレは馬鹿を慎むようになった。少なくとも、そういう相手には選ばれなくなった。

関係は正常化したのが、そう頻繁に会ってはいない。彼は自宅を一時的に観光客に貸したりもするので、こちらから連絡することもなかった。

ミッシェルのアパートメントはル・スケの外れの古びた建物の中にあつた。狭い階段を昇り、その階段の途中に後から設置した共同トイレがある。

フランスの古い物件には、かねてよりトイレが存在しなかつた。それはベルサイユ宮殿にすらなかつたとされるので間違いないだろう。

シャワールームだけは近代的な味気ないものが備わっている。バスタブはない。でもビデは必ずある。

そんな不便など特に気にならない。古びた部屋にはバルコニーの付いたフレンチ・ウインドウがあり、海への見晴らしが素晴らしい。

ミッシェルは漆喰壁を自力で壊して外し、二部屋をぶち抜き広く使えるよう工夫している。彼らしい部屋の意匠が気に入る。描いている絵を見せられた。

「ムンクに似てるね」

「え？ 誰？」

「ムンクよ、知らないの？ 北欧の、確かノルウェーの画家の……」

発音が悪いのか単語が違うのか、それとも彼が知らないのか、ともかく全く伝わらない。諦める。

地元のミュージシャンだったという彼は画家になり、当時は独学で建築とデザインを学びながら働いているようだった。暮らしては決して楽ではなさそうである。既に三十代に入っている。

可愛いバレリーナの写真が壁に貼られていた。別れた元妻と暮らす娘と聞く。若い時に生まれた子供と判る。

ミッシェルのリードは既に点火されている火をさらに燃やすだけでいい。無理がない。彼の準備は、そもそも出逢いの瞬間から始まっている。ずっと継続して絶やさず燃えるよう気を配られている。上手だった。女が何を望むのかを知っている。

ミッシェルに抱かれてアナルセックスを初めて体験する。驚きはなかつた。形だけ抵抗する。背面から強引に押し入れられると、突き抜ける快感が身体の芯を通り過ぎて留まった。雰囲気だけの男ではなかつた。

まずユルゲンがやってきた。それからしばらく経つと、クワティも訪ねてくると葉書が舞い込む。

ユルゲンはフライブルグで屋根葺き職人の親方をしている。

「何を考えてんだっ」

吐き捨てるように言う。

まあいい、食事くらいは付き合うかと腹を括る。

三十代後半のユルゲンにはアーミスという若い可愛い彼女もいた。

アーミスはいつも、プービレと呼んで人形のように抱いて歩く真つ黒いブードルを飲み屋のカウンターにも連れていた。

ユルゲン親方の元で職人として働くクワティと暮らす前には、独身のユルゲンの家へ泊まったこともある。だがそれは誰も知

らないだろうし、知ったとしても特別なことでもない。

「イマデさんは、どうして職人みたいな肉体労働者ばかりを相手に選ぶのか、変わってるなあ」

「そうお？ だってインテリは面倒臭くて。シンプルで素直な人が楽でいいわ」

正直な感想だった。

フライブルグより帰国して社会学の教授になる日本人の友人は、納得しなかった。

そもそも今さら何しにカンヌまで会いに来るのか。

ユルゲンは問題なかったがクワテイの方は良くない。悲しむだけだろう。来ない方がいい。

独学して英語も少しは話すクールなユルゲンとは食事だけで、バカンスを楽しめと笑顔で送り出す。こっちも、それほど暇ではないと告げれば済むことだった。

憂鬱な数週間が過ぎクワテイもやってきた。

ドイツ語しか話さない彼を駅まで迎えにゆく。

「良く来たね」

とは言ったものの亡霊を迎えるような気分である。

彼のために予約した安いホテルへ引つ張ってゆきチェックインを手伝う。ロジーから近い。

地中海料理のブイヤベースを二人で食べた。生まれて初めて食べたが味わえない。会話が弾まない。

町を案内し思いつきでアイススケート場へ行く。時間が経つのが遅い。

夜には「スピードウェイ」へ連れていく。

初めてパステイス51やリカールなどの茴香酒フニグライを飲んだ店である。

南仏は暑いいためフランス産の大衆酒として冷えたビールより好まれていた。一般的に氷と水を入れて水割りにして飲む。

薄緑色の透明な液体は水に触れるなり白濁し、黄色味を帯びた乳白色がかる。吐き出そうかなと思うくらい歯みがき粉に酷似した甘い風味だが、ここでは病みつきになる。

重厚な広い楕のカウンターには、黒と緑のオリーブの実を無造作に載せた小皿がポンポンと置かれている。フリーなツマミだった。

店構えは高級だが早い時間はいつも空いていた。

イタリア出身の巨漢で明るく人あたりの良いハンサムなアントニオが、年配の女性オーナーに仕えるような按配で張り切っている。オープンして間がない。隠れ家のように便利に利用した。

おそらく男性として生まれた人であろう、とびきりの金髪美女が来店した時には見惚れた。長身で、すらりとした長い脚まで上下の黒いレザーに包みこみ、傍らには、正しく躡けられた漆黒のドーベルマンを従える。空気が一変した。あたかも店に似合っていた。

その晩、そこでクワティを放り出す。

このまま、彼のお守りをするのは逆効果だろう。もう終わっている。

暮らしている間に彼からは、酒乱による暴力も受けた。この身を投げ出せるほど強い想いなんぞないと認めた。戻せるものは何もない。

嫌いになったのではなく縁が切れた。それを分かかって欲しかった。

秋が終わり冬へ移っている。冬だからクワティとアイススケートしたのである。

相変わらず午後は散歩に励み、夜は飲みに出かける。

若い女性専用のロジーには一応は門限があり夜は玄関の戸が施錠される。

罰則のない門限破りの常習者は、またお前かと問いたげな渋い顔をした宿直の老人にガチャガチャと内鍵を開けてもらう。

なんとなく体がだるい。熱でもあるのかなと測ると微熱である。少し前から腰も重い。

ベッドが軟らかいのが悪いのかと床にマットレスを落とすし直に寝たりしてみた。治らないばかりか頑固な便秘も続く。思い切って薬局で浣腸を買って試すが効果がない。

とうとう食欲もなくなり排尿にも問題が起きる。だんだんと

イレが近くなり徐々に痛みも伴うのだった。それなのに量は出ない。スツキリしない。

明らかに病気だった。だが病名が分からない。

西ドイツでは加入していた医療保険にも加入しなかった。強制されなかったからである。

不安になり実家へ電話していた。

「盲腸じゃないの？」

「えっ、そうかな」

盲腸ならば吐き気や強い痛みが下腹部に起きるらしいが、それは感じない。

「盲腸だと入院だよね……」

「そうよ。アツコ、大変だわ！」

「まあ、まだ分からないよ」

報告だけして様子を見る。

初期の授業が退屈なためサボりがちになっていたカレッジへも、とても通えない。

「ギイちゃんに聞いたらね、そっちでは、すんごく医療費かかるって言うのよ。もし盲腸だと莫大な金額よ！ 百万とか。どうしましょう！」

「そうなの？ でも、盲腸かどうか、とにかくこっちで医者には診てもらわないとさあ。いい？」

時差があるため明け方の廊下から、声をひそめて説き伏せるように国際電話する。

どんな時でも愛人の著名人をひけらかす。なにより金の心配を最優先する。その愛人はフランスに住んでたわけじゃないだろ、作家なら何でも知っているのと自慢したいのかと腹が立つ。

もつとも、心配だからすぐ行くと飛んで来られても迷惑なだけである。つい二年前の夏に彼女が団体のヨーロッパ旅行のついでにと会いにきた時にはロンドンまで迎えにゆき、さらにフライブルグも案内するなどアテンドしている。しばらく疲れが残った。

カレツジで事務員をしている住人のコレットに事情を話し医者頼む。授業の出席率が悪いようねと冷たい表情を隠さない。それでも彼女は迅速に適切な対応をした。

比較的若い男性の医師が往診に現れた。

辞書を片手に症状を説明し、盲腸でしょうかと質問する。熱を測り、型通りの一般的な診察が済むと、片手に医師は薄いラテックスの手袋を無言で着用した。

ああ、やはりなと仰向けに寝る。下着を脱ぐと彼は奥まで調べる。パーフェクトだと感嘆した。

日本での婦人科検診などには仕切りのカーテンが不可欠だった。変な台にも乗る。それは事情が違うとはいえ、見えないのは不安を誘う。敏感な部分に何をされるかと怯えない女性はいないだろう。

こうして対面のコミュニケーションが医師と取れる診察ならリラックスする。羞恥心も少ない。信頼した。

なんとか医師は辞書から説明を試みる。腎臓の単語を選ぶ。だが病名も詳しい説明も難しいと彼は諦めた。

尿と血液の検査へ行くと指示される。完全分業化されていた。教えられた地図の場所まで行きレセプトを渡し、採尿と採血される。

翌日の午後に見れたのは医師ではなく往診を専門にする看護婦だった。

尿と血液の検査結果は往診した医師へと伝わり診断が下されている。そのため彼女は医師の指導で治療目的の抗生物質などを患者に注射に通う。

通訳がないので不便だったが、どうにかそこまでは理解する。病気は急性の腎炎らしい。あるいは腎盂腎炎か。

遊び過ぎて細菌感染したものかと落ち込んだが、それよりも、移動したり落ち着かない人間関係もある。

過度なストレスは精神的なダメージから免疫力低下を引き起こす。そこに冷えや過労が加わる。状況は、そのように判断すると無理がない。

人間は気が張っている時よりもホッと安心した時に病に倒れたりする。イギリスの寄宿舎でも、しばらくしてから、まだ十代なのに免疫力の衰えた老人に多いとされる帯状疱疹を患った。思ったより弱い面がある。まだ気づかなかった。

エレノは慈悲深い人だった。太っていて良く笑う。看護婦

なら必ずそうとは限らない。

「……痛いのか？」

たった一人、言葉も満足に通じない異国で病気になった若い娘の腰を、そつと、いたわるようにさする。じんわりと、ふくよかな手の温もりが伝わった。

「メルシイ。気持ちいいです」

荒んでいた心が救われる。

日に一回は、彼女が太い注射をお尻に打ちにくるのを待った。回復するにつれ二人で片言のおしゃべりを楽しむ。

ミッシェルは、たぶん正しかった。モジリアーニの絵のモデルのような心細くて不安定な表情を、痩せて細くはなくてもきつとしていた。彼の指摘は内面だったろう。同じ感性をエレムも持っていた。

治療が完了する日、優しい眼差しで彼女は、住所とフルネームを書いた紙をくれる。

「何かあったら、いつでも訪ねていらつしやいね。少しは英語の話せる娘もいますからね。遠慮しないのよ」と繰り返す。

嬉しかった。その紙切れは必要とされなかったけれども、帰国の日まで大切に保管される。心の片隅に暖かい確かな安心を保持するようになった。

日本語の活字に飢えていたが読むものがない。代わりに、せつせと英語を読む。

イギリスで買ったまま放っていたクリステイの推理小説を辞

書を片手に読破し、フライブルグの蚤の市で挿絵が気に入り購入したデフォアの『ロビンソン・クルーソー』を読む。児童向けの編集だった。物語は知っている。大好きな作品である。

さらに、ノルウエーのオスロにある博物館で実物模型を見学して感激した、ヘイエルダール著『コンティキ号漂流記』の英語版を丹念に読む。極めて面白い。

まだ見ぬジンベイザメの白い斑点のある体表を辞書を引くながら想像する。クルーたちの新鮮な感動がシンプルかつ躍動感のある文章から伝わる。筏の下の大海原を悠々と滑るように泳ぐカーペットみたいに巨大な最大の魚。その生き物の、無心な姿がありありと迫ってきた。

こんな旅に誘われたら何を犠牲にしても参加したい。真理を探求するためにこそ生きている。冒険が冒険でないかは自分が決める。生きていくのは、そもそも、そういうことではないのか。死ぬまでは真剣に生きようとするのは生命を授けられた者に与えられる宿命だろう。

枕元のラジオでは、千九百八十という数字を連呼するフランス語の曲が流れ始めた。どんな内容かは全く分からない。軽快なフレンチポップスは耳に残る。

一九八〇年までに一ヶ月を切った。来年の自分は、どこで何を何を考えて生きているだろう。

続く(前編終了)